聖徳太子と物部守屋

――逆臣守屋から地蔵菩薩守屋へ――

伊藤　純

一　丁未の乱における物部守屋　―守屋は逆臣―

六世紀半ば、日本に仏教が伝わってきた。数十年後、崇仏派と排仏派との間で内乱が起こった。五八七年の丁未の乱である。崇仏派の中心は蘇我馬子（?～六二六）と聖徳太子（五七四～六二二）、排仏派の中心は物部守屋（?～五八七）。守屋が崇仏派に殺される場面を『日本書紀』は次のように記す。

五八七年（崇峻即位前紀）七月（日本書紀2　小学館一九九六年）

蘇我馬子宿祢大臣、諸皇子と群臣とに勧めて、物部守屋大連を滅さむことを謀る。…（中略）…（守屋）大連、親ら子弟と奴軍とを率て、稲城を築きて戦ふ。是に大連、衣摺の朴（えのき）の枝間に昇りて、臨み射ること雨の如し。…（中略）…爰（ここ）に迹見首赤梼有りて、大連を枝の下に射堕して、大連并せて其の子等を誅（ころ）す。是に由りて、大連の軍、忽然に自づからに敗れぬ。（五一一～五一三頁）

守屋と守屋軍は崇仏派によって誅されたのである。「誅す」、罪ある者＝守屋を殺したのである。日本書紀は、崇仏派（国）の意向に反逆する守屋を逆臣としてえがいている。丁未の乱、最初の史料『日本書紀』では守

屋は逆臣だった。

二　奈良から平安時代初中頃（八～九世紀）の守屋像

八世紀前半『上宮聖徳法王帝説』（東野治之校注『上宮聖徳法王帝説』岩波文庫　二〇一三年）

丁未年（五八七）六七月、蘇我馬子宿祢大臣、物部守屋大連を伐つ。時に大臣の軍士、剋たずして退く。故に則ち上宮王、四王の像を挙げて、軍士の前に建て、誓いて云わく、「若し此の大連を亡ぼすを得ば、四王の奉為めに、寺を造り尊重供養せむ」という。即ち軍士勝つを得て、大連を取り訖んぬ。此れに依りて即ち難波の四天王寺を造るなり。（六八頁）

とある。守屋は馬子に伐たれたとあり、『日本書紀』の守屋評価と同じ立場である。

平安時代初期『上宮聖徳太子伝補闕記』（大日本仏教全書一一二冊）

丁未年（五八七）七月、物部弓削守屋大連、宗我大臣と仏法興不の論を縁にして、内に姻親の義を忘れ、外に君臣の道を蔑し、睚眦の怨を発す。志逆の軍を興し、己の党類を率い、稲を以て城と為す。…（中略）…太子亦誓いて四天王の矢を放つ。即ち賊首の大連の胸に中る。倒れて樹を墜つ。衆乱躁す。川勝進みて大連の頭を斬る。（三頁）

『上宮聖徳太子伝補闕記』は法隆寺で編纂された書である。この時点で法隆寺でもやはり守屋は賊首、賊徒の首なのである。

三　四天王寺でつくられる新たな守屋像
―太子と一心同体になる守屋―

九一七年（延喜一七）『聖徳太子伝暦』（大日本仏教全書　一一二冊）

今、難波の百済寺の老僧に遇うに、古老の録し伝える太子の行事・奇蹤の書三巻を出す。四巻の暦録と年暦を比校するに、一つも錯誤せず。余が情大に悦

び、此の一暦に載す（四二頁）

このように『聖徳太子伝暦』は巻末で自らの成立事情を語っている。これによれば、『聖徳太子伝暦』は四天王寺の周辺、あるいは四天王寺の主導のもとで成立した書であることは明白である。『聖徳太子伝暦』での五八七年（用明二）七月、丁未の乱に相当する記述を見たい。

乃ち軍の允（まつりごとする）秦造川勝に命じて白膠（ぬりで）の木を取りて、四天王の像を尅み作り、頂髪に置く。…（中略）…太子、舎人迹見赤梼に命じて四天王の矢を放たしむるに、遠く逸（はし）りて大連が胸に中たり、倒（さかさま）に木より堕つ。賊衆躁乱す。川勝、大連の頭を斬りつ。〈本願縁起に云く、守屋臣是生々世々相伝の破賊なり。震旦漢土に男女の身を現し、仏法を弘興し、有情を教化するの時、吾身に従順し、影の如く離れず。…（中略）…逆臣・悪禽屡ば現れ、人心を揺動し迷乱す。横（よこしま）に凶情を挟み、田地を掠め取り、寺塔を滅破す。是只守屋の変現のみ。吾と守屋、影と響の如し。寺塔滅亡せば、国家壊失す〉（一五頁）

日本書紀から、八～九世紀代まで、逆臣、賊首であった守屋像が、四天王寺の影響が色濃い『聖徳太子伝暦』によって大きく変化する。ここでは守屋を「破賊なり」としながらも、太子の言葉として「吾身に従順し、影の如く離れず」、さらに「吾と守屋、影と響の如し」と。太子自ら守屋と自分は一心同体であったと述べているのである。逆臣守屋はここに至って太子と一心同体となるのである。

一〇〇七年（寛弘四）に『四天王寺御手印縁起』（大日本仏教全書　一一八冊）。

（太子は）諸氏々人々を以て、初めて寺塔を起立し、仏経等を造り写さしむ。その時物部弓削守屋臣、深く邪心を含み、寺塔を焼亡し、仏経を滅亡す。この時に当たり、仏法将に滅びんとす。悲泣懊悩し、陛下に奏聞し、軍兵を発起し、かの守屋臣を討伐す。

弓を定めて慧(さとし)い箭に和順し、遠く逸して逆臣の胸にあたる。遂に以て地に落つ。…（中略）…守屋臣、是生々世々相伝の破賊。震旦漢土に男女の身を現し、仏法を弘興し、有情を教化する時、吾身に従順し、影の如く是の身を離れず。…（中略）…逆臣悪禽屡ば現れ、人心を揺動し、迷乱す。横(よこしま)に凶情を挟み、田地を掠め取り、寺塔を滅ぼし破る。是只守屋の変現にして、吾、守屋と影と響きの如し。寺塔滅亡するは、国家壊失す。（五八・五九頁）

見ての通り、『四天王寺御手印縁起』は『聖徳太子伝暦』を下敷きにしてつくられていることが分かる。当然のことながら太子と守屋は一心同体である。

一二二七年（嘉禄三）頃（四天王寺本）『太子伝古今目録抄』（『大日本仏教全書』一一二冊）

一　逆臣等の事　欽明御時の逆臣は尾輿大臣是なり。敏達天皇の時は守屋なり。前後廿余年相隔つなり。或は云う、尾輿大臣、太子の在世より先廿年に薨去。云々（五五頁）

一　守屋権化の事　太子云う、守屋は生々世々に相伝破賊なり。云々。実は悪人、世々去り去る。権者は仮に悪人を示し、衆生を化す。故に世々来り来るなり。（六二～六三頁）

太子伝上巻云　守屋合戦、太子十六歳丁未（五八七年）七月一日始り寄す。大連勝海、守屋朝臣追還せられ給う。又午剋、寄せ給う。…（中略）…其の本誓願を遂げ、仍りて当日より玉造の地に至り、始て柱を立つ。其の日より毎日四天の一体を供養令め給う。守屋の菩提の為なり。（八三頁）

（四天王寺本）『太子伝古今目録抄』は「天王寺秘決」ともいわれ、四天王寺周辺で編纂された『聖徳太子伝暦』を軸として、聖徳太子の伝記記事など一々書で一六七項目を立て、仏教経典、漢籍などを引用して注釈を付し、奇瑞などを付加した書である。

ここでは守屋は逆臣・破賊とされながらも、玉造の地に柱を立て、四天王の一体を守屋の菩提のために供養していると。太子と守屋が一心同体ということから更に進んで、太子自らが誅殺した守屋を供養しているとある。かつては逆臣・賊首・破賊とされていた守屋が、ここに至り供養される対象になるのである。

四　法隆寺でつくられる守屋像

一二三九年（延応元）頃『古今目録抄　下巻』（大日本仏教全書　一一二冊）

次塔前に石在り。此れを御拝石と名づく。或は廊の未申（南西）の角の伏蔵の蓋と云う。此の伏蔵には銅瓦一万、之を埋める。此当寺の料なり。此の廊の西南角の下には瓦六万枚焼き埋める。並びに守屋の頸切の大刀、相具に之を埋める。（一〇二頁）

廻廊未申（南西）の角の下に瓦六万埋め置く。守屋の頸切の大刀、守屋の腹巻、甲、鎧、弓、箭、大刀、刀、皆具に之を埋める。彼の滅罪生善の為なり。寺の守護料なり。云云。（一〇四頁）

法隆寺、推古天皇元年癸丑（五九三年）春正月、太子鵤郷に詣で給い、法隆寺を立つ。前年所々相尋ね給う。今年始めて之を建つ。四天王寺、荒陵池上に移し立つ。同時なり。御等身四天王、難波天王寺移し立つ。守屋の頭、并て大刀、衣裳、法隆寺に移し置く。云云。二寺共に正月建て始める。天王寺は二十八御年八月十五日、供養令め給う。法隆寺は三十五の御歳丁卯二月十五日、供養し給う。云云。或は卅六。（一一二頁）

太子宣はく、我は守屋と生々世々の怨敵なり。世々生々の恩者なり。影形に随う如し。已に五百生を過ぐ。云云。太子守屋共に大権菩薩。仏法を弘めんと為し、此の如く示現す。（一一四頁）

『古今目録抄』（「聖徳太子伝私記」「太子伝古今目録抄」とも）は、法隆寺の僧・顕真が編集した書である。

四天王寺では『聖徳太子伝暦』以降、確認してきたように守屋に対する評価が大きく変わってきた。

法隆寺はここに至って、『聖徳太子伝暦』や（四天王寺本）『太子伝古今目録抄』に影響を受けたのか、突然守屋に言及する。自寺の廻廊の南西角に守屋を誅殺した時の品や、守屋が身に着けていた品を埋納し、供養していると。太子と守屋は共に「大権菩薩」であると。仏教を弘めるにあたり、あえて悪役の姿を装って現れたのが守屋だというのである。

五　地蔵菩薩になる守屋

一三一八年（文保二）頃　文保本『聖徳太子伝記』（聖徳太子全集　二巻）

一　用明天皇御葬礼の事

そもそも太子、守屋との御合戦は、無明法性の虚戦（そらいくさ）なり。一切衆生断、あるいは証理仏果成るべき、其の化儀を顕わし、三度勝を得ざることは、三毒煩悩の大将軍、降伏し難し事を表示す。第四度に勝ことを得、終に弥陀釈迦の本願力神通力に依り、極楽往生、四徳波羅蜜を証得すべき事を表示（しめ）すなり。しかる時に、太子衣服を整え、天皇の御屍に向かい奉り、謹みていわく、「そもそも悪逆の守屋、すでに誅せしめおわる。今は此の世に一念の忘執留めたまうべからず。早く往生浄土の御本望を遂げたまうべし。吾も興隆仏法利益衆生の宿願早く成就して、再会一仏浄土を遂げ奉るべし」とて、双眼より御涙を流す。（三三九頁）

崇仏・排仏をめぐる内戦（丁未の乱）を、「無明法性の虚戦」であったと断じる。しかも、誅殺した守屋に対して「一仏浄土を遂げ奉るべし」と、太子は涙を流しながら願うのである。

一三七二年（応安五）『顕真得業口決抄』（大日本仏教全書　一一二冊）

蝦夷大臣、太刀おば川勝に賜う。即ち守屋の頸を切る。此の太刀は、法隆寺の廻廊の未申（南西）に之を埋める。或る説に金堂の鎮壇中に入れる。云云。

（一一三頁）

或る説に云う、守屋は地蔵の化身。云云。其の所以は、無仏世界度衆生の願に依り、此の身を現す。（一一四頁）

『顕真得業口決抄』は『古今目録抄』を記した顕真の甥・俊厳が編集した書である。『古今目録抄』からの抄出記事が多いのは当然であるが、ここでは『古今目録抄』にはなかった表現「守屋は地蔵の化身」と、ここにさらに新たな守屋＝地蔵説が生まれる。

一六二四年　袋中著『南北二京霊地集』引く「天王寺略縁起」（『琉球神道記』角川書店　一九七〇年）

（物部守屋との合戦に勝利後　五八七年）七月十日に和州に還御なる。守屋が頸をば法隆寺の戌亥（北西）の角に埋玉ふ。時言「汝、今より悪心を止て、仏法の守護神と成べし」と。頸又唱「我願既満」と云。太子「衆望亦足」と、次玉ふ。法隆寺の鎮守、是なり。

抑（そもそも）此戦は、無明法性の空軍（そらいくさ）なり。其内証を云はば、守屋は勝軍地蔵、太子は救世観世音なり。昔の契（ちぎり）に、主と成り、臣と成。悪と成り、善と成て、仏法障碍の者は必ず滅する相を顕んと。互に約束ある故に、今仮に此戦を現し玉ふ。釈迦に提婆、迦葉に花上等の如し。（二五七頁）

法隆寺の『古今目録抄』を引いたかのように、守屋の頸を法隆寺の鎮守のために北西の角に埋めたと（『古今目録抄』では南西の角）。さらに続けて守屋は勝軍地蔵、すなわち軍神として尊信される地蔵菩薩となる。

一六六六年（寛文六）　寛文本『聖徳太子伝記』（牧野和夫編『聖徳太子伝記』三弥井書店　一九九九年）

又、守屋の大臣、中臣の勝海以下八のくびをば、法隆寺の廻廊戌亥（北西）の第三間のはしらの下にふかくうづませ、孝養とも侍りけり。（一〇四頁）

太子はこれ観音の顕現、慈悲利生の薩埵なり。守屋はすなはち地蔵菩薩の変化なり。…（中略）…太子と守屋と御合戦は無明法性のいくさなり。

（一〇五頁）

太子は観音、地蔵菩薩が変化（へんげ）して現れたのが守屋だと。『顕真得業口決抄』以降、守屋＝地蔵菩薩説が定着しているのが分かる。

六　信濃善光寺での守屋像
―四天王寺に追従するかのように―

一四二七年（応永三四）頃か『善光寺縁起』（応永縁起）（大日本仏教全書　一二〇冊）

終に推古天王御宇、定居三年癸酉（六一三）立願の如く、速に四天王寺を草創す。艮（北東）の角の柱を彫り守屋の頸を納む。今に至り守屋柱と名くは是なり。（二四九頁）

善光寺が自らの寺でなく、何と四天王寺の柱に守屋の頸が納められていて、これが「守屋柱」だと。四天王寺側では、自寺内で守屋の柱なるものが存在しているといった発言はない。『聖徳太子伝暦』以降の四天王寺での守屋評価の変化を学びすぎたのか、善光寺が四天王寺に守屋柱があるとの話をつくってしまう。

後の『善光寺縁起』の注釈書でも四天王寺の守屋柱は語り続けられる。

一七八五年（天明五）『善光寺縁起集註』（『大日本仏教全書』一二〇冊）

川勝則ち（守屋の）頸を持ち太子に捧ぐ。太子視る。両眼は涙を浮かべ唱して曰く、一切衆生に化し、皆仏道に入らしむ。…（中略）…後に天王寺の乾（北西）柱に（守屋の頸）収む。今世に守屋柱と謂うは是なり。太子密かに守屋の逆罪を意（おも）う。凡情を以て測り難し。云云。乾俗乾字なり。乾柱は、戌亥の方柱なり。測度なり。

（三二四～三二五頁）

四天王寺に守屋柱があると『善光寺縁起』は語るが、現在の善光寺本堂（一七〇七年に再建）内には一本の「守屋柱」と呼ばれる柱がある。

一七〇七年（宝永四）「善光寺如来堂再建記」『国宝善光寺本堂保存修理工事報告書』（善光寺　一九九〇年）

信州善光寺如来堂図　来迎柱拾八本、槻桂大さ弐尺弐寸、丸柱内壱本は守屋柱、弐尺弐寸角、長七間半余。（一九〇頁）

善光寺御本堂差図之覚　瑠璃段の桁行三間余也。梁行弐間六寸九分、此内杉角柱一本守屋柱と云。（一九一頁）

御材木請取出方の覚　杉柱五本之内壱本守屋柱也。右はあら安より出る。（一九三頁）

「善光寺如来堂再建記」は一七〇七年の本堂再建（現在の本堂）に関する文書、「善光寺の略縁起」「御本堂御普請の次第」「信州善光寺如来堂造営始終」を一八六九年（明治二）に清水虎之助が一冊に編集、手写したもの。ここでは守屋柱は二尺二寸角、長さ七間半の杉材の柱で、「あら安」で伐採された材とある。

残念ながら守屋柱の謂れなどは語られていないが、一

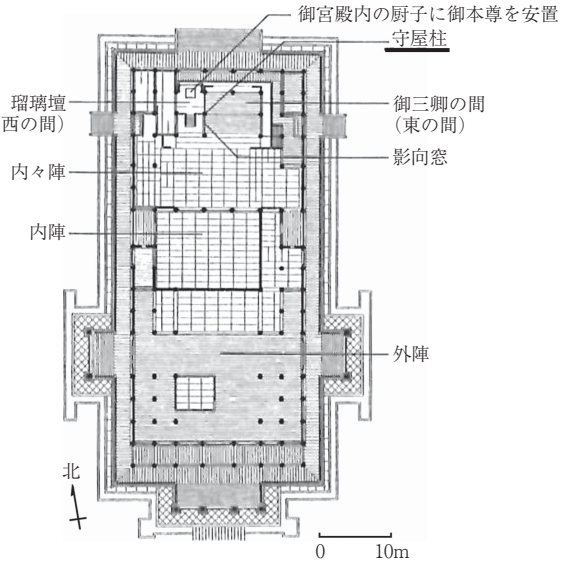

図 1　善光寺の「守屋柱」（『善光寺』1973 年）

七〇七年に再建された現本堂に守屋柱なるものが存在しているのである（図1）。

後の史料であるが、一九〇三年（明治三六）『善光寺名所図会』（博文館）では守屋柱について語っている。

瑠璃壇の東北に守屋柱といふものあり。普通の柱なれど古来より有名なるものなり。そが縁起は未だ詳かならず。麻積（おみ）の臼上の巻に、守屋柱、瑠璃壇の乾（北西）の柱に守屋柱といふ。我寺の縁起に上宮皇子、守屋大臣を亡し給ひし後、四天王寺を創立し給ひ、艮隅（北東）の柱に守屋が頸を納て守屋柱といふことみへて、かへりて我寺の守屋柱のゆえよしをばもらせり。炎上にその伝を失へるもの也。…（中略）…聖徳太子が守屋連を誅戮したまひ、四天王寺の柱に守屋が首をかけたまひしにより起りしか。本堂にあるは、また同太子は比（し）よなく本尊を崇敬したまひしにより、かかるゆかりによりてここにもかくは名付けしにはあらぬか否乎。敢て識者の考証を俟つ。（二四～二五頁）

ここでは善光寺が作り出した四天王寺の守屋柱、これに倣って善光寺でも守屋柱があるのだろうか、といった内容である。

善光寺の守屋柱については「善光寺本堂の柱は、向拝の柱のほかは全部丸柱であるが、内々陣に一本だけ角柱があり、守屋柱と呼ばれている。…（中略）…善光寺の守屋柱は、るり壇の東にあるが、やはり四天王寺と同じ意味で守屋柱とよばれているのだろう。八角のように見えるが、角柱の隅を削った、いわゆる面取り柱であろう。側面三七センチ、面の部分が一〇・七センチ、面取りをしなければ五七センチ角の柱である。全面に金箔をおしてあるので、金の柱のようにみえ、いかにもガッチリしている。るり壇と三卿の間の境にこの柱があり、この手前に横六三センチ、縦四五センチの連子窓がついている」（小林計一郎「守屋柱」『善光寺』信濃毎日新聞社一九七三年）と、今日解説されている（写真1）。

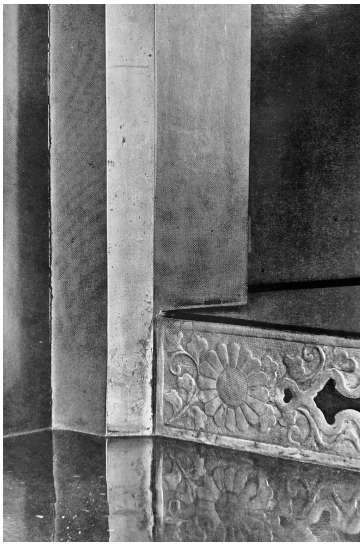

写真1　善光寺本堂内の「守屋柱」（『善光寺』1973年）

七　四天王寺で祀られる守屋

一六一三年（元和九）『天王寺御建立改渡帳』（四天王寺古文書1　清文堂出版　一九九六年）

一　熊野権現宮

一　神躰三躰　木造　御長弐尺五寸極彩色

（二五八頁）

『天王寺御建立改渡帳』は、一六一四年（慶長一九）の大坂冬の陣で焼失した伽藍の再興時の記録。ここに見える「熊野権現宮」は守屋を祀る祠なのである。

一七九八年（寛政一〇）『摂津名所図会』　巻三（四天王寺の項）

守屋祠　太子堂の後にあり。今参詣の者、守屋の名を悪(にく)むにや、礫を投げて祠を破壊す。寺僧これを傷んで熊野権現と表をうつ。祭る所、守屋大連・弓削子連・中臣勝海連の三座なり。

とあり、『天王寺御建立改渡帳』にみえる「熊野権現宮」は守屋祠であることは明らかである。大坂の陣以前に守屋を祀る祠があったかどうかについては、残念ながら分からないが。

その後も、一六八五年（貞享二）『四天王寺年中法事記』（『四天王寺史料』清文堂出版　一九九三年）では「守屋祠」、一七三七年『四天王寺名跡集』（『大日本仏教全書』一一八冊）でも「守屋臣叢祠」が登場する。

現在も中心伽藍の東側の境内地に「守屋祠」が存在している（写真2）。

写真 2　四天王寺の「守屋祠」

まとめにかえて
―時とともに変化していく守屋像―

ほぼ時系列で守屋に関する史料を見てきたが、これまで述べてきたことをまとめてみたい。

『日本書紀』の記述以降、平安時代初期の『上宮聖徳太子伝補闕記』まで、守屋は仏教導入に反対した逆臣・賊首として語られてきた。

平安時代中期、四天王寺周辺で成立した『聖徳太子伝暦』が大きな画期となり、守屋像は大きく変化する。守屋について「吾身に従順し、影の如く離れず」「吾と守屋、影と響の如し」と、太子に語らせるのである。太子と守屋は一心同体となる。

守屋について積極的に語ってこなかった法隆寺であるが、一三世紀以降になると『聖徳太子伝暦』に影響を受けたのか、『古今目録抄』以降、伽藍内で守屋を祀っているとの話を作り出すのである。

一四世紀以降に流布する聖徳太子物語の中では「丁未の乱」は「無明法性の虚戦（空戦）」であったとされて

しまう。さらに、逆臣・賊首であった守屋は、何と地蔵菩薩にまでなってしまうのである。

一方、信濃の善光寺では一五世紀になると、四天王寺での守屋評価の変化に追従するかのように、自寺ではなく四天王寺で守屋の頸を祀っているという守屋柱の話を作り出す。

このような話の延長上になるのか、一七〇七年に再建された現善光寺の本堂内には守屋柱なるものが存在しているのである。善光寺側では自寺の守屋柱の由来や経緯については語るところはないのだが。

排仏派・逆臣守屋との内戦に勝利した聖徳太子が建立したのが四天王寺。『聖徳太子伝暦』を画期として守屋評価の変化を主導してきた四天王寺では、江戸時代以降境内地に守屋を祀る「守屋祠」が存在してきた。「丁未の乱」の内容を知り、四天王寺に詣でる人々にとっては、守屋は仏教に反対した逆臣である。四天王寺に守屋を祀る守屋祠があることは承服しがたかったのだろう。守屋祠を破壊しようとする人々から守屋祠を守るため「熊野権現」という名称を借りて、守屋を祀り続けてきたのである。

『日本書紀』から現代に至るまで、逆臣であった守屋の評価、守屋像は時とともに変化してきたのである。

おわりに

先年、『南北二京霊地集』に引かれる「天王寺略縁起」を読んでいた際（『奈良学研究』二五）、四天王寺・善光寺での守屋柱というものがあることを知り、守屋について手近な史料を見てみた報告が小文である。

史料の羅列だけで、守屋の評価が時とともに変化していく背景は如何に?という質問がでることだろう。私は、聖徳太子信仰の変化・発展にともなって守屋像もそれに応じて変化してきた、といった単純・明解な回答をするつもりは毛頭ない。時間軸にそって守屋像の変化を知ることが何よりも重要と考えるものである。

これまで敢えて触れなかったが、一七三七年『四天王寺名跡集』での「守屋臣叢祠」の記述に「今播州赤穂郡板越浦に祭る所の大酒社、是守屋大連なり。因て神社門

に比す」という一文がある。「板越浦に祭る所の大酒社」は、赤穂市坂越に鎮座する秦河勝を祭神とする「大避神社」である。『広文庫』には「守屋の祠　出定笑語、四―二四　播磨国赤穂郡坂越の浦と云ふ所に、大酒の社と申すがある。これは物部大連の祠で、ただ一神を祭つてあると申すが、是れはかの萬などを相殿に祭るべきこと、又心ある人は序もあらば参詣致すべき事でござる」とある。今日、秦河勝を祭神としている大避（大酒）神社に守屋が顔を出してきたのである。秦河勝についてはかつて少しながら考えてみたことがある（『日本文化史研究』五三）。

それぞればらばらに考えてきた三人、聖徳太子・物部守屋・秦河勝が、私の頭の中で走り回りはじめた。

〔参考文献〕（刊行年順）

一九七二年　林幹弥『太子信仰』評論社
一九七四年　嶋口儀秋「聖徳太子信仰と善光寺」『仏教史学研究』一六―二（後に『太子信仰』一九九九年）
一九八〇年　新川登亀男『上宮聖徳太子伝補闕記の研究』吉川弘文館
一九八五年　牧野和夫「絵解きと聖徳太子絵伝」『一冊の講座　絵解き』有精堂（後に『中世の説話と学問』一九九一年）
一九九五年　『書き下し「聖徳太子伝暦」』世界聖典刊行協会
一九九七年　阿部泰郎「聖徳太子信仰」『聖徳太子事典』柏書房
一九九七年　松田和晃「聖徳太子研究史」『聖徳太子事典』柏書房
二〇〇一年　倉田邦雄・倉田治夫「活字本校訂考」『善光寺縁起集成』Ⅰ　龍鳳書房
二〇〇一年　榊原史子「『四天王寺縁起』の原本と写本」『ヒストリア』一七六（後に『四天王寺縁起』の研究』二〇一三年）
二〇〇三年　松本真輔「中世聖徳太子伝における物部守屋像」『国語国文』七二―一二（後に『聖徳太子伝と合戦譚』二〇〇七年）
二〇〇四年　松本真輔「悪役守屋の形成過程」『古代中世日本文学論考』一一　新典社（後に『聖徳太子伝と合戦譚』二〇〇七年）
二〇〇九年　宮元健次『聖徳太子　七の暗号』光文社新書
二〇一〇年　榊原小葉子「地誌としての寛文刊本『聖徳太子伝記』」『太子信仰と天神信仰』思文閣出版
二〇一五年　長尾晃『善光寺コード』鳥影社

二〇一五年　関裕二『信濃が語る古代氏族と天皇』祥伝社新書
二〇一六年　牛山佳幸『善光寺の歴史と信仰』法蔵館